

■学校経営のポイント

教師の働きがい

喜名 朝博

学園祭の時期となった。小学校の教員免許と中高の保健体育の教員免許を取得できる本校の本学科では、その特色を生かした取組がある。地域の子どもたちを招待して行うミニ運動会である。今年もたくさんの子どもたちと保護者が参加してくれた。

裏方に徹する教師

2年生を中心に年度当初から企画し、綿密な計画と準備を重ねて当日を迎えるが、その過程は実際の小学校の運動会の企画・運営そのものである。

子ども主体の特別活動にあっても、教師の企画力や指導力は欠かせない。特に健康安全・体育的行事としての運動会はその運営方法も含めて教師の企画力と指導力の集大成と言える。しかし、あくまで主体は子どもたちであり、教師は裏方に徹し、前面に出ることはない。

ミニ運動会への取組を通して、学生はそんな教師の姿勢を学んでいく。子どもたちの安全を最優先に、各場面での危険を予測し、回避するための方策を実行する。子どもたちの集中力が途切れないためのタイムマネジメントも欠かせない。発達段階を考慮した競技内容、分かりやすい説明など、教師が考えること、なすべきことは多岐に及んでいることを体感していく。そして、学校現場がそうであるように、仲間と協働しながら運営していくことの大切さにも気付かされる。

子どもたちの達成感・教師の達成感

教師は、子どもたちの「できた！」「分かった！」という喜びを自分事のように喜ぶことができる。それが教師の心もちである。子どもたちが自ら達成感をもてるようにすることが、教師の達成感であり、教師の喜びとなる。教師が自身の達成感だけを目指し、子どもたちを置き去りにすれば、子どもたちの心も教師から離れていく。

学生たちも、子どもたちとともに動き、ともに喜ぶことを通して教師の心もちに近づいていく。懸命に応援し、一緒に喜び、一緒に楽しむ姿からは、将来の教師の姿を見ることができる。

伴走者としての教師

子どもたちが「できた！」「分かった！」といった喜びが得られるのは、自らの「できるようになりたい」「分かりたい」という欲求が満たされるからである。子どもたちに達成感をもたせる以前に、教師には子どもたちの欲求や意欲を高めるという大事な仕事がある。しかし、教えることを意識しすぎると、このことを忘れてしまいがちだ。

教えることで「分かる・できる」を実感させるよりも、子どもたちの学びを支えることで「分かる・できる」ようにしていこうという指導観の転換は、「学びの伴走者」という言葉で説明される。子どもたちが主体的に学び、自ら成長できるよう、様々な視点から支援することで、子どもたちの可能性を最大限に引き出すことができる。時にはペースメーカーとなって子どもたちを先導し、時には後ろから声をかける。横にいて対話しながら走ることもあるだろう。そして、共にゴールできたときの喜びを共有できることが教師の「働きがい」となる。

学びの専門職としての気概を

本年8月27日の中教審答申には、「学びの専門職としての『働きやすさ』と『働きがい』の両立に向けて」という副題がある。学びの専門職とは、学ぶということの意味と意義を理解し、それを実践できることである。さらに、その過程やゴールでの子どもたちの変容を捉え、共感することである。学びの専門職としての気概をもって伴走していきたい。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

●教員の働き方の実態を捉えなおし、ウェルビーイングを高める方法を提案！《好評発売中！》

教員のウェルビーイングを高める学校の「働きやすさ・働きがい」改革

露口健司【著】 A5判／定価 2,530 円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> をご利用ください。

